

第二章 愚禿の信竟

第一節 往生極樂の道

「一。おのおの十余箇国の境を越えて身命を顧みずして尋ね来らしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり。然るに念仏より他に往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと、こころにくく思召して在しましてはんべらんは、大きな誤なり。もし然らば、南都・北嶺にもゆゆしき学生達多く座せられて候ふなれば、彼の人々にも会ひたてまつりて往生の要よくよく聞かるべきなり。」

第二章の内容

第二章は、関東からはるばる道を求めて来たお同行に對しての聖人のご教化であります。内容を伺いますと、四分段となるようであります。

一節、往生極樂の一道

二、念仏一道

一、帰依三宝

二節、無我の仰信

二、絶對信順

三、内觀の真相

三節、師資相承の血脉譜

四節、聖人の悲涙と真面目しんめんぼく

第二章については、そのかみ、「光明」誌に続いていただき、やがて後、『愚禿の信境』として一冊にまとめて出版致しましたので、ここでは、どうしようかと思いましたが、だいぶん年月もたつていますし、重ねていただくことに致しました。この節の切り方や、その節に對する題名のつけ方なども多少違つていますが、別にあらそわなければならぬ問題ではありません。このたびは、このように頂戴するのであります。

不惜身命の求道

「おのおの十余箇国の境を越えて身命を顧みずして尋ね来らしめたまふ御ころざし、ひとへに 往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり。」

一。元仁元年五十二歳の時、常陸の国の稲田で、御本典、すなわち教行信証一部六巻をご製作あそばした聖人は、嘉禎元年秋、六十三歳のご高齢に達せられてから、いかなる御思召か、住み慣れ給いし関東、お慕いする同行門侶ともお別れあそばして、ひとり京洛の地にお帰りなされたのであります。それから、二十七年間、京都の地において、静かにご著書にご執筆あそばして、弘長二年秋霜月二十八日、満九十歳お浄土にお還りなされたのであります。

常陸の国から、往生の一道に対して深い不審を抱いて上京した同行に対するこのご説法は、いつのころか、しかと判明致しませんが、しかし八十歳のご老年に至られるからのご説法であるとされております。

一。「おのおの十余箇国の境を越えて身命を顧みずして……」

じつとこの文字を凝視していますと、さまざまなお話が思われます。

私は今、この原稿を河内支部で書いています。そして、たつた先まで、大経講座では、「嘆仏偈」中の、発願求仏、その中、校量頭勝の節、すなわち、

「仮使^{たとえ}仏有りて百千億万。無量の大量、数恒沙の如くならんに。一切斯^{これら}等の諸仏を供養せんより。如かず道を求めて、堅正にして卻^{しりぞ}かざらんには。」

という所をお話し致しました。仏法においては、百千億万の諸仏無量の僧宝、これに対して供養するということは、尊い仏事とされており、しかるに、その無量の諸仏菩薩に供養するより、道を求めて不退転であることが勝れたことであると、法蔵の求道の志願の堅正であること、金剛であることを師仏に誓われた御言^{みこと}であります。

供養には限りがある。求道には限りがない。

仏を真に供養するとは、仏の教法を五体投地して聞法することである。熾烈な求道心の伴う貧女の一灯か、王者の権勢のみがものをいう長者の万灯か、仏の記別は、彼女の一灯の上に与えられる。

法蔵は、ただ成仏の願に燃えている。成仏の願は、そのまま求道の願となる。

この三点がお話の中心でありました。求道には供養が伴う。そこで供養だけ受け取ろうとする教役者も、供養だけで済ませておこうとする衆生も、越えなければならぬ、清算し懺悔しなければならぬ雑毒海に沈没しているのであります。あさましい宗教の現状はいつでも、ここから出発します。それを踏み越えて、真実の一道を現前せしむるものは、それはただ「如かず、道を求めて堅正にして卻^{しりぞ}かざらんには」この法蔵の願心、そのままの願作仏心の潑刺^{はつちゅう}たるによるよりほかないことでもあります。

一。現代は、ものの手取早く解決されることを求める時であります。あまり時間と労力を費さずして、効果のすぐれたことを求める。宗教にしても、真実であることよりも、ご利益本位に考えられ、ご利益があり、効果があるといわれる方に走ってゆき、幾度か大衆は手を焼きつつも、性懲りもなく、次から次へと迷信に走ってゆきます。無限に真実の道を求めてゆく願心の生まれてこないかぎり、どうにもならぬことあります。しかも、かかる願心もまた、教えによつてのみ得られるのであることを思う時、邪教迷信の世に流れ出ることを悲しまずにはいられません。

一。しかるに私どもは、真剣に道を求め、不惜身命の聞法を続けていられる同胞の多くをいただきました。何にもかえがたき如来より賜った尊きものは、この一心尋道の勝友であります。

まことに、われらの道は明かであります。

苦しみに遭遇する、聞法すべきである。人間の享樂に溺れそうな日、求道すべきである。真実に歩め、真実を求めて歩め、それによって非難迫害に遭う、さらに忠実に求道すべきであります。そこにのみ、永遠に生かされる道は開いてくるのであります。

一。関東の同行たちは、草鞋わらじに足をかためて、てくてく常陸の国から十余ヶ国の境を越えて、山を越えて、野に伏して、はるばる聖人のじきじきのご教化を受けるために来たのであります。

当時、関東には、ご子息、慈信坊善鸞様の惑乱あり、日蓮上人の四箇格言「念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊」の折伏の叫びが巷を騒々しくしていたようであります。そうした世間の雑音が契機となつているように言われております。何にせよ、聖人を慕うて身も命もすてて、はるばる真実を求めて上京し、聖人のお目通りに出た関東の同行の上に真剣なものを拝ままずにはいられません。

『大無量寿經』には、

「設たひ世界に満てらん火をも、必ず過ぎて要もとめて法を聞かば、会あらずまさにま仏道を成じ、広く生死の流を済すふべし。」

と説き、また、

「是の故に弥勒設たひ大火の三千大千世界に充滿するあれども、要かならずまに此を過ぎて是の教法を聞き歡喜信樂し、受持誦誦し、如説に修行すべし。」

と説かれてあります。聖人はこの意を和讃して、

「たとひ大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名みなをきくひとは

ながく不退にかなふなり」

と仰せられました。いただくべきであります。

念仏一道

一。「然るに念仏より他に往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと、こころにくく、思召して在しましてはんべらんは、大きな誤なり。」

この御言みことを繰返して拝読しますと、そこに、関東からたずねて来たものの「誤り」に對して、聖人の全てが、中心生命が、露堂々と出されてあることを拝むことができまます。尋ねて来たものも、説き聞かすものも、往生極樂の道、すなわち、現世、ただ今から、尽未来際にわたつて、真実に生かされる、たった一つの道を求めて生くべきはずでありました。それに対して聖人は仰せられました。「念仏より他に往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらん」と思い、さらに念仏よりほかに道があり、奥深いことがあるのを知らしてくださらぬように思っているのは、それは誤りである。聖人の宣言は明瞭でありました。

「もし然らば、南都・北嶺にも、ゆゆしき学生達多くおわ座せられて候ふなれば、彼の人々にも会ひたてまつりて往生の要よくよく聞かるべきなり。」

聖人は教えようとせず、自己の道を語られます。

聖人には、いつの時にも、一つのもの、一貫したものが光っております。はるばる尋ねて来たものに対するおことばも「ただ念仏」よりほかなかったのであります。おことばは一見、不親切のようであります。念仏よりほかのことが知りたければ、南都か北嶺叡山に行け、そこには賢い学者もお出でになると、仰せられるのであります。しかしそこには、何をもつてもいかなともすることのできない不拔の信心が光っております。

一。念仏は、聖人を死地に更生せしめた生命であります。机上の空論ではなかつた。人の体は全一な生命に生かされています。机上の生理解剖の書ができてから後に、人の血に、生命があるのではない。机上の生理学の書は、生きる体を説いたに過ぎない。

念仏は愚禿の生命である。血であります。分解も、抽象も許されざる全一なる生命の道であります。身命を打込んで求めた末に見出された必然の道であります。「身命を顧みずして尋ね来」たるものの求めるものも「往生極楽の道」ではないか。

「往生之業念仏為本」とは、師の授けられたる全てであり、愚禿の信順し得る唯一の道でありました。しかるに念仏よりほかに、往生の道でもあり、そのほかの法文等をも知つていられて、教えてくださらないのであろうと、心にくく思うて来た関東の同行同侶の考えは「大きな誤なり」と説破せられたのは当然であります。

第二節 無我の仰信

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人に賺されまゐらせて念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候。そのゆえは自余の行を励みても仏になるべかりける身が念仏を申して地獄にも墮ちて候はばこそ、賺されたてまつりて、といふ後悔も候はめ、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし。」

ただ念仏

一。「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり。」

この第二節は、まことに聖人の徹底せる無我の仰信の世界を窺うことのできるありがたいところであります。その中を、一、帰依三宝、二、絶対信順、三、内観の真相と、三段にすることができると思います。ここに出したのが、その中のまず帰依三宝の意であります。

一。「親鸞におきては、ただ念仏して」とは帰依法の意であります。

「ただ」とは、唯の字であります。この唯とはいかなる義であるかというに、『義林章』一末には、唯の字義について、三義を出しております。一簡持、二決定、三顕勝の三義であります。この三義を通して、准釈すれば、唯とは次のごとき意となります。

唯とは簡持ということである。簡持とは、えらびたもつこと、すなわち、聖道八万四千の法門を簡び捨てて、浄土一門、念仏の一法を持つのが、簡持であります。そこで聖人は「ただ念仏して」と簡持の意を仰せられるのであります。

次に、唯とは、決定である。浄土門念仏の一法のみ、真実に助けられて、往生成仏する道であると決定することであります。そこで「ただ念仏して」と仰せられる中には、動かすべからざる、金剛不壊の大決定心が拝まれるのであります。まことに「親鸞におきてはただ念仏して……」と仰せられる意には、外からのいかなる雑音も奪うことのできない大信決定が動いております。内なるいかなる煩惱も滅すことのできない、如来廻向の大信心が光っております。

次に、唯とは顕勝であります。聖道を廃して浄土門念仏の一法を立つるところには、浄土の勝を顕わされております。まことに念仏の一法は、如来本願の法であります。凡聖の自力の計らいによつて構造せられたものでなくて、一実真如の功德宝海であります。絶対不二の不行であります。その本願円頓一乗の最勝業であればこそ、ただ、念仏の一法に生きたまうのであります。

一。『唯信鈔文意』には、

「唯信鈔といふは、唯はただこのこと一といふ（決定の義）二ならばことを嫌ふ（簡持の義）語なり。また唯はひとりといふ意なり。信はうたがふ心なきなり、即ちこれ真実の信心なり（決定の義）。虚仮はなれたる心なり。虚はむなしといふ、仮はかりなりといふ、虚は実ならぬをいふ、仮は真ならぬをいふなり、本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを唯信といふ（顕勝の義）……また唯信はこれ他力の信心のほかに余のことならばずとなり（簡持の義）。即ち本弘誓願なるが故なればなり（顕勝の義）。」

以上のごとく、お言の中に、この簡持、決定、顕勝の三義を窺うことができるようであります。しかしこの三義は、信心の智慧が、如来本願の聖意のままに、唯一絶対の不行を、唯一絶対の不行として、機の上に領受した、その一心の三相であつて、三つあるものではありません。三義があつて、一が成立つのであります。でありますから「唯念仏する」とは、徒にいたずらということでもなく、わけなくということでもなく、唯一絶対の名号が、衆生の大信を成就して、機の上に受け取られ、その生命となりきつてくださつた世界を表されたものであります。

一。「南無阿弥陀仏。往生之業、念仏為本。」とは、本師法然上人のみ教えでありました。この師のみ教えは、聖人をして「棄雑行兮帰本願（雑行を棄てて本願に帰す）。」と、千古の疑團を氷解せしめて、他力本願の大信心を成就し、念仏の人たらしめたのであります。念仏は師の生命であるとともに、愚禿の全てであります。

弥陀にたすけられる

一。「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと……」

聖道門において学ぶところは、己を救うものは己であった。いかに海路は遙かなりとも、波浪は高くとも、自ら船を仕立てて自ら櫓ろかいを操って、渡らなければならぬのでありました。闇夜の暗は深く、智慧の灯は明滅して、方角も何も立たない時、願行具足の真実のみ親が、大願弘誓の船を難度海に浮かべ、「弥陀観音大勢至 大願のふねに乗じてぞ 生死のうみにうかみつ 有情をよばうてのせたまふ」と、助けきつてくださったのでありました。弥陀にたすけられまいらする、永劫普遍の太行南無阿彌陀仏が、本願によつて廻向せられて、信ぜさせて助けられるのでありました。自力によつて自己を助ける、掛声は勇ましいが、真実ではない。他力本願の清浄真実が、そのまま衆生の上に廻向し顕現して、機法一体の自覚を成就してくださる。本仏に対する絶対帰依は、人間最後の一番正しいそして深い、そして真実に救われる道でありました。

一。「念仏して弥陀にたすけられる」ということは、念仏しておいて、それから弥陀にたすけられるということではありません。弥陀の本願にたすけられるということ、念仏することとは一つことなのであります。南無阿彌陀仏のうちに、一切の願行は成就せられてある、それが、衆生の心にあつては大信となり、口業にあらわれては称名念仏となるのであります。弥陀にたすけられるとは、本願の意を領解して仰せられたのであり、念仏してとは、廻向の太行に立つて言われたのであります。いづれにしても、本仏の真実大悲本願に絶対帰依し、信順して開いた道が念仏の一道であります。

よきひとの仰せ

一。「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり。」

「よきひと」とは法然上人であります。行き詰つた世界に、はからずも恵まれた善知識であります。聖人にとつては、いかなるものを無視することができても、この人だけは、ついに無視することのできない存在であります。

聖人、化土巻にいわく、

「涅槃經に言く、經の中に説くが如し、一切梵行の因は善知識なり、一切梵行の因無量なりと雖も善知識を説けば則ち己に摂尽しぬ。」と。

善知識なくば、誰によつてか法を聞く。「諸有衆生、聞其名号信心歡喜」とは、大經における、法界に仏道を顕現する唯一の正しい規模を示された文字でありました。「其の名号」とは、善知識の説きたもう教説であります。

法然上人すでに、本願の名号に生きたもう。来りて仰げ、「阿彌陀如来化してこそ本師源空としめしけれ。」「智慧光のちからより 本師源空あらはれて 浄土真宗をひ

らきつつ 選択本願のべたまふ。」廻向せられた信心の智慧眼、その眼をもつて本師源空を拝する時、本仏の智慧光さながらの人格ではないか。「曠劫多生のあひだにも 出離の強縁しらざりき 本師源空いまさずば このたびむなしくすぎなまし。」叡山二十年の聖道難行の修行も、宿縁来つて、この師に値うもつあためではなかつたか。聖人のすべてはこのよき人の仰せによつて開かれた、念仏の道でありました。

唯信唯行

一。「親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり。」

前においては、帰依三宝の意として、この御文をいただきましたが、また他力浄土門の真意にたちますと、この御文は第十八願文および本願成就文の意であります。

「ただ念仏して」とは、本願文の乃至十念のところで、他力の行をさされたものであります。他力の大行とは、第十七願成就の名号が、心に受け取られて大信となり、口にあらわれて念仏となるのであります。それが本願文の乃至十念であります。至心信樂の大信内に満足し、外に下至十声とあらわれるところの、いわゆる報謝の称名がそれであります。他力真宗の信を行の中に撰めて行の上から示せばこの称名念仏であります。お念仏は、救いを求めるものの請求祈念の声ではなくて、救いきられた者の報謝の相であります。如来の弘誓に満たされた者の、自然じねん法爾ほうにの正定業であります。お念仏が正定業であるのは、称えた者の声の力や、称えた数によるのではなくて、仏願ぶつがんに順したがうがゆえであります。本願のお誓いによるがゆえであります。すなわち一声の念仏にも如来の久遠の願行が打込まれてあるからであります。『唯信鈔文意』には、

「乃至十念、若不生者、不取正覚といふは、選択本願の文なり。この文の意は、乃至十念のちかひの名号をとなへん人、もし我が国に生れずば仏にならじと誓ひたまへるなり。」

と示されました。

お念仏は、誓いの名号であります。「名号をとなへん人もし我国に生れずば仏にならじ」とは若不生者のお誓いであります。お念仏申すことは、すなわち大悲弘誓に信順することであります。すなわち「たすけられまゐらす」ことでもあります。「親鸞におきては、唯念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべし。」と聞けば、念仏して、それをたてとして、条件として助けられるように聞こえますが、そうではありません。念仏するということが正定業に生かされることである。たすけられることでもあります。

一。次に「ただ」の言についてであります。「ただ」が念仏の上にあつて、唯行と、念仏行の唯一絶対を表すのみでなく、「唯」の字は「よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり。」と仰せられるところの「信」の字にもかかるのであります。そこで、唯の字は、念仏にかかつて唯行、信心へかかつて唯信、唯信唯行、信も南無阿弥陀仏よりほかになく、行も南無阿弥陀仏しかなく、信行ともに名号一体におさま

り、微塵の自力なきことを示されたのであります。行も、単行無信でなくて信を具するし、信もまた、必ず行を具するのであります。信一念に救われきる、唯信独達でありつつ、信は必ず行を伴う、行信不離一体であります。『末灯鈔』にも

「信の一念、行の一念ふたつなれども、信を離れたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。その故は行と申すは、本願の名号を一声となへて往生すと申すことを聞きて、一声をも称へ、もしは十念をもせんは行なり。この御誓をきき疑ふ心の少しも無きを信の一念と申すなり。信と行と二ときけど、行を一声すると聞きて疑はねば、行を離れたる信は無しと聞きて候。また信を離れたる行もなしと思召すべし。これは皆弥陀の御誓と申すことを心得べし。行と信とは御誓を申すなり。」

とあります。またその次の章にも

「尋ね仰せられ候ふ念仏の不審の事。念仏往生と信ずる人は辺地の往生とて嫌はれ候ふらんことおほかた心得難く候。その故は弥陀の本願と申すは、名号を称へん者をば極楽へ迎へんと誓はせ給ひたるを深く信じて称ふるがめでたきことにて候ふなり。信心ありとも名号を称へざらんは詮なく候。又一向名号を称ふとも信心あさくば往生しがたく候。されば念仏往生と深く信じてしかも名号を称へんずるは疑無き報土の往生にてあるべく候なり。」

とお説き下さいました。信と行のこと、これによつて明かであります。これによつて「ただ念仏」ということは、「ただ信ずる」ということと一体不離であることがわかるのであります。

一。次に「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり」との言を、「とよきひとの仰せを被りて信ずる」ということを中心にしていただきますと、これは、本願成就文の意であります。信ずるのは、独断で信ずるのではなくて、善知識の教えを聞いて信ずるのであります。

「諸有の衆生、其の名号を聞いて、信心歡喜し、乃至一念せん。至心に廻向したまへり。彼の国に生れんと願ずれば、即ち往生を得、不退転に住せん……」

この本願成就の文において、「其の名号」を聞いて、「信心歡喜し」の「其」とは、善知識の説きたもう教えのことであります。しこうして教えは本願名号のいわれを説く教えでありますから、「其の名号を聞いて信心歡喜する」のであります。善知識の仰せは、「ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」との仰せでありました。その仰せのままに聞いて信ずる、そのままが、如来本願を信ずるのであります。この教えに順うことと、本願を信ずることが、一致して、そこに、真実の白道、信順の一道が開いてくるのであります。いくら聞いても聞くことはすべて話にして、しかも信心が得たい得たいとあせつていいる人があります。あるいは、勝手な信心を造つて正しい教えを聞こうともせぬ人があります。いずれも間違いであります。信心は、いわゆる「金剛の真心を獲得する」のでありまして、善導大師の「此の心深信せること、金剛のごとくなるによりて、一切の異見・異学・別解・別行の人等の為に動乱破壊せられず」と仰せられたがごとく、牢固まこととしてぬくべからざるものではありませんが、しかし、無

我に謙虚に、仰せのままに順う柔軟の心であり、淳厚の心であります。今もまたその柔軟にして、しかも金剛の信の風格が現れております。聖人にとって、念仏の一道は、唯一絶対の大信心であつて、一あつて、二もなく、三もない必然の道であります。よつて「親鸞におきてはただ」と仰せられるのであります。

絶対信順

一。「念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人に賺すかされまゐらせて念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候。」

これは、念仏の境における絶対信順の意を述べられたものでありますが、そこにいろんなことを知らせていただけるのであります。

その第一は、結果の予想を超えられた風光であります。念仏が浄土に生るる因か、地獄へ墮つる業か、総じて以て存知しない。これは、現前の一念に満たされきることによつて、結果の予想が、念仏の条件になつていないことを示されたのであります。これこそ、如来廻向の清浄真実なる大信心の相であります。もし貪欲が信心と変化して、化けている時には、必ず結果を確かめることによつて、現在におちつこうとするのであります。しかしそれは、ただ自分で思い定めるのであつて、金剛不壊の大信ではあり得ません。結果がよければ信じよう、結果が悪ければ、そうはすまい。こうした結果本位、御利益本位の功利的な信心は、純正なるものではない。それこそ、自力9貪欲の相であります。そうした不淳な心がものを言っている間、大決心が生れるものではない。如来招喚の声のままに、現前の一念に満足しきつて、一道を歩むところに、真実の念仏の境地があります。

凡夫の予想は必ず、名利か、幸福か、愛欲かであります。如来の願意はただ「真実道」であります。真実道か。名利享樂か。そこに根本の差、迷悟の差別があるのであります。

一。「念仏はまことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人に賺すかされまゐらせて念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候。」

これは、念仏の境における絶対信順の意を述べられたものであつて、そこにいろんなことを知らされる中に、その中の第一は、現前の一念に満足して、一切結果の予想を越えた世界であると申しおきました。

まことに現前の一念に安住して、結果の予想によつて今を計らわれないということ、如来本願によつて内に充実しきらねばできないことであります。ただ、無我の大信心、無上菩提心においてのみできることでもあります。聖人は信樂釈において、

「信樂といふは則ち是れ如来の満足・大悲・円融・無碍の信心海なり。」

と仰せになりました。信樂こそは、如来の満足大悲の信心海であります。その信心海そのままの大信心が、第十八願絶対他力の信心であります。眞実信心はすなわち如来心にはえぬいたものであります。至心釈には、

「不可思議兆載永劫に於て、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざる無く、真心ならざる無し。如来清浄の真心を以て、円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。」

と如来心の久遠の眞実をお示しになりました。空虚な衆生の心内も、この久遠の眞実大悲の廻向によつて満たされて、初めて「地獄におちたりともさらに後悔」なき身にしていただくのであります。久遠の眞実に対する絶対信なくして、どうしてかく堂々の宣言ができませんよう。

一。絶対信は、絶対順であります。信とは本願への帰依であり、順とは教えへの随順であります。「たとひ法然上人に賺されまゐらせて念仏して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候。」そこには、教主善知識に対する絶対信順の決定語が雄々しくも叫び出されてあるのであります。

浄土門ということ、私が救われる以前に、如来の本願に生ききつて、身をもつて如来の實在したもうことをお示し下さるお方があつたということであります。そしてその方が、私と相對關係、すなわちただの道のお手本だけでなくて、私にとつて絶対的關係を持つていてくださることでもあります。私よりも先に道を成就し、身をもつて私を救つてくださる方、その方こそ私たちにとつて善知識であります。親鸞聖人こそは、日本国土の内面から生れ出でたもうたみ仏、そのみ仏の本願に生きて、私たちに世尊の眞実教を私のものになるようにお説きくださるところの慈父であります。その人格的存在を盲にしては、生きることの許されない方であります。しかしそれは、人間的情愛によるのではなくて教えの眞実によるのであります。こうした意味において、法然上人は、親鸞聖人においては絶対的存在でありました。前にもいただきましたようにご和讃には

「智慧光のちからより 本師源空あらはれて、

浄土眞宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ。」

「曠劫多生のあひだにも 出離の強縁しらすぢりき

本師源空いまさずば このたびむなしくすぎなまし。」

智慧光とは、阿弥陀仏のことであります。如来の智慧光さながらの本師源空ましまさずば、出離の要道は開くのではなかつたのであります。

「諸仏方便ときいたり 源空ひじりとしめしつ」

無上の信心をしへてぞ 涅槃のかどをばひらきける。」

まことに上人の教えによつて、涅槃の門は開いたのであります。それは教えが、仏智そのままのものであります。ゆえに、信心の智慧を成就して、その智慧によつて、上人の眞実の教えに無条件に随順させたのであります。明信仏智のしからしむるものであります。断じて盲従でも、盲信でもなかつたのであります。信心の智慧と、智慧による人格の本質的交渉であります。

われらはこうした師弟一如の境が、如来廻向のものであったことを忘れてはならないとともに、法然上人が、十五歳の時から四十三歳まで、衷心の声に忠実に、なやみつつ大蔵経を繰返してついに念仏一道に生きられた方であり、聖人また二十九歳まで二十年間、師と同一の悩みを続けた方であったことを忘れてはなりません。そこには、偽らざる真剣真実の心と心との同心一体の流れがあつたことを知るべきであります。もしこうしたことを知らずして「たとひ法然上人に賺されまゐらせて云々」の言葉を弄ぶならば、大変なことであります。

内観の真相

一。「その故は自余の行を励みても仏になるべかりける身が念仏を申して地獄にも落ち候はばこそ、賺されたてまつりてといふ後悔も候はめ、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし。」

この言こそ、聖人が念仏一道に生きたまう、動かすべからざる、現実の根拠、内観の真相であります。

「その故は、自余の行を励みても仏になるべかりける身」、その身が法然上人にだまされて「念仏して地獄にも堕ちて候はばこそ、賺されたてまつりてといふ後悔も候はめ。」日蓮上人は「念仏無間」と怒号する、念仏は無間地獄への道だと言う、しかれば、法然上人に賺されているのか。「たとひ法然上人に賺されまゐらせて念仏して地獄に堕ちたりともさらに後悔すべからず候。」何ゆえに後悔がないのであろう、「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし。」そこに動かすべからざる、偽わるべからざる、機の真実がある。この見れば見るだけ、知れば知るだけ、いよいよもつて明かに知られてくる、無有出離之縁のわれを、本願大悲によつて救わんとの大法の深信は、水の低きにつくがごとく、あまりに自然に領解されたではないか。叡山二十ヶ年の修行も、今また師のみ教えも、いよいよ「いづれの行も及びがたき身」であることを実証せしめたもうにすぎないのであります。

一。かく考えます時、「賺されたてまつりて」とのみ言葉は、かりに念仏を誹謗する者の言葉を借るといえども、聖人の信心の真骨頂を表白されたのにすぎないのであります。百歩、千歩譲つて、たとい念仏が無間の業であろうとも、それがなんで悔いでありましょう。もとより「地獄は一定すみかぞかし。」この覚めきつたる者の真証をいかんともすべき道がないがゆえであります。それよりもさらに、身をもつて体解せられたる念仏門の真実、『大無量寿経』の絶対真実は、世間一片の風波によつて動かすべくもありません。聖人の宣言はかかる金剛の一心に裏づけられたる決定語であります。

一。親鸞聖人は、内観に徹したお方であります。自己の真相に覚めきつた方であります。「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」それは一時の感傷でもなく、ずるい自己の自己弁護でもなく、まことに見出されてくる、自己胸中の事実であります。善導大師は、彼の二種深信において「自身は現に是れ罪

悪生死の凡夫、曠劫より已来常に没み、常に流転して出離の縁あることなしと深信す。」と仰せられました。この無有出離之縁の言と言ひ、聖人の今の「地獄一定」の諦観と言ひ、聖者は皆その軌を一にしていられます。いったいこれはいかなる意義を有するものでありましょうか。

一。懺悔業障ということ、普賢の行願の一つであります。普賢の行願の一つとして、懺悔業障ということが尊ばれるのは、普賢菩薩は、その行願によつて、生死に随順して衆生とともに助かろうとする大悲そのものだからであります。

普賢は、如来浄土の本地の徳そのままに人生に現れて、如来浄土の徳を人生に具体的にらしむるのであります。『大無量寿経』の会座に出現する不可称計の菩薩は「皆普賢大士の徳に遵ひ」とあります。しこうしてかかる普賢の行願に生きる菩薩は、皆ことごとく荷負群生の徳として、一切衆生を代表し、これを荷負して重担としたものであります。しからばいかにして、荷負群生の徳は具体的となるのでありましょう。それは、慈悲によつて一切衆生の運命を荷負いきるよりほかありません。しからばいかにして一切衆生の運命を荷負うか、それは一切衆生の内的運命を、自己において発見するよりほかありません。しからばいかにして一切衆生の運命を自己において発見するか。いわく、一切衆生の偽らざる業苦の相を自己において見ることです。そしてそこに真実の教えを聞き、真実の法を生きるのであります。

凡夫はもとより菩薩ではない。しかし、下下品の凡夫の上において現れようとも、廻向顕現された徳は、普賢の徳であります。

一。悪逆の人、必ずしも悪人ではない。見出されたる悪人ではない。善人必ずしも善人ではない。犬猫に一人の愚者悪人なきがごとく、自己において、罪悪生死の底なき闇を発見するということは、畜生ばなれのできた世界でないことではないことでもあります。でありますから、法然上人は「聖道門は智慧をきはめて生死をはなれ、浄土門は愚痴にかへりて往生す。」と言われましたが、愚痴の法然必ずしも愚者ではない。すでに師とすべき人もなき、当代第一の智者であつたのであります。当代第一の大学者智者が、愚痴にかへつて往生し、それに至らざる人が、かへつて聖道門に残つているとは、大きな皮肉であります。ここに仏教の、浄土教の文化的道義的意義があるのであります。

一。人はみな、罪悪生死そのものである人生と具体的であります。でありますから、人生に随順して生くべきであります。しかし事実において、人は内なるわれによつて、名利等の貪欲によつて、軽気球のごとく上り上つて人生と抽象的であります。それゆえに、自己および人生の真相を見ることができないのであります。

生死界である人生においては、私一人が、清浄に一切の罪悪煩惱を離れて生きることはできないようになっているのであります。自己を知らぬ独善の人が嫌われるのはそのためであります。この世では、聖者という聖者、尊い聖者と拝まれるがごとき方は、みな、自ら清浄である、自分には罪悪煩惱はない、と言われた方ではなくて、自

己において、一切衆生の真相を見つめた方であります。自己および人生のありのままの真相を自己において知って、それを抱いて、真剣に道を求め、法を聞いた方であります。自己および人生の真の相を知るといふことがその基調であるかぎり、何ものもこれを破壊することができないのであります。如来の智慧光に照破され、攝取されて、絶対安住の境に住しつつ開かれたる眼、開かれたる耳は、一切衆生のありのままを受け取って「地獄一定」を諦観せしめたのであります。これまことに如来の無碍光によらずば成就せぬことであります。

所詮人間は、人生に向かつて一切の窓という窓をことごとく開いたままで、自己を凝視しつつ、久遠の太陽たる如来に向かつて合掌し願生の一道を生きること、それ以上の道を与えられていないのであります。

第三節 師資相承の血脈譜

「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず、善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか歟。」

師資相承の血脈譜

沈痛なる自己凝視の祖聖は、眼を一転して、突如として久遠の真実を標示せられました。今まで、大地の上に具体的なる三宝、人生生死海における経緯を中心にして、人間中心の如来を語っていられた聖人は、忽然として、眼を高く絶対の領域に注がれました。

「弥陀の本願まことにおはしまさば……」

これまことに、聖人の全てであります。「弥陀の本願まことにおはします」とは、実に、聖人の全我の声であります。全我をもつて体験せられた唯一絶対の世界であります。自明の真理であります。初めて、魂のどん底より動かされ、満たされ、解決され、氷解された、真実教、大無量寿経によつて、自然に法爾に開いてきた、絶対不二の確信であり、唯一の道であります。

一。しかもこの普遍の真理の確認は、聖人一人の独断ではなかつた。釈尊すでに、大經に明かされたる第十七願によつて、生死五濁の世に出現して、本願名号、超世無上の大法を説くをその本懐とせられました。「如来世に興する所以は、道教を光闡し、群萌を拯ひ、恵むに真実之利を以てせんと欲してなり。」と宣言したまひ、自ら、久遠の本地、大寂定、弥陀三昧に入つて、遂に本願の真実を開顯したもうたのであります。釈尊の背後にあつて、釈尊をして釈尊たらしめ、釈尊の説法を通して、法界に普く流行したもうのが、本願の名号であります。久遠の真実は今、釈尊となつて人生に顯現し、八相の迹門を残しつつ、真実教を説かしめたもうたのであります。

「弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。」

弥陀と釈迦、二にして不二、二尊一教の真実ば、世の根本道義の成立の立証でありました。

世尊に発したる生命の巨流は印度にあつては、龍樹、天親の二大菩薩、支那にあつては、曇鸞、道綽、善導、日本にあつては、源信、法然と、いわゆる七高僧となつて聖人に來つたのであります。真実なるものは必ず歴史を成就する。不滅の文化の主流となつて歴史を成就して客觀的事実となる。

見よ念仏道は聖人の主觀の独断ではなくて、普遍妥当なる客觀的真理であつたのであります。人間の虚仮によつて造られたものでなくて、真人格から真人格への、生命の流れであつたのであります。

真実宗教とは、ただ空疎なる概念でも、人間の功利的欲念への迎合でもなくて、生ける人格から人格への、生命の流れそのものであります。

大地の上に具体的に足跡を残す人の上に、仏を拝まない信心は如実のものとは言われません。それでありますから、聖人は、御本典に『涅槃經』を引いて仰せられるのであります。

「一には道ありと信ず、二には得者を信ず、是の人の信心、唯道有りと信じて、すべて得道の人有りと思はず、是れを名けて信不具足と為す。」と。

道があると信じて、道を得た人がおること信じないならば、法は威力を失つて、話となり、仏の説法を聞かないで、仏話となります。そこには誠の信心は成就しないのであります。でありますから、次に引かれた、『華嚴經』の御文には「常に清淨僧を信奉せば、則ち信心退轉せざることを得ん。」と説かれるのであります。

しかしながら、もし人のみを信じて、人を超え、大地の道の人を通して、それを超えたる久遠の真実を拝み得ないならば、それは声門であつて、大乘菩薩道ではない。大無量壽經の宗教は、ひたすらに、応化の人を、菩薩を、恒沙の諸仏を超えて、無量壽仏に歸命せしめんがための教説であります。聖道經典が、無量壽を、釈尊の本壽として説かれるのに対して、大經においては「能く壽命を住すること億百千劫無量無量にして復此に過ぎたり」と、世尊が無量壽に住したもうこと、すなわちその本壽ではなくて、その所住たることを示されるのであります。

大地の仏菩薩の教法を静かに聞きつつ、その本源に歸命し、歸入するところに、信心が成就するのであります。そうした法の聴者のみが、如来聖人のみ意にかなうことでもあります。たとえば、太陽の光に向かつて眼を失えば、一切のものをみることはできな、太陽の光に向かつて眼の開いた者のみ、一切の色相を見るがごとくであります。久遠の旨に開眼手術を施してくださいるのは、仏の教ではありませんが、開かれたる心眼は、久遠の真実を拝むのであります。久遠の真実に向かつて信心の智慧が開かれた時、かえつてまた大地の「人」の真偽を見るのであります。

聖人は、法然上人のみ教えを通してやがて仏説を領解せられて、南無の眼を開かれた。そこには、久遠の真実、尽十方無碍光如来が、増上縁として大悲弘誓のみ手をさしのべておられた。この久遠の大悲真実に直入して後、再び大地の上を見かえす時、そこに、一貫等流する血脈の中に浮かぶ真人格七人を発見せられました。それがすなわち七高僧であります。七高僧のみならず、釈尊すらが、弥陀本願あつての釈尊であ

ります。「弥陀の本願まことにおはしませば、釈尊の説教虚言なるべからず。」
 という明徹な大宣言でありましょう。

日本自体の仏

世には仏法をもつて、外来思想なるがゆえに、排斥しようとする人があります。それは愚であります。太陽に関する研究学問は外国から輸入されたものであつても、太陽は、外国を照らす光でありつつ、またわが国を照らし出す光であります。

久遠の太陽に照らし出される三国にわたつての真人格を見る眼、そこには、外国の仏でなくて、日本の仏、日本自体から尊いものを觀照する太陽が現れてきているのであります。じつに平安時代から鎌倉初期にかけて、大和民族は、民族自体の如来、国土の觀音、勢至の二菩薩を生み出すための悲痛な悩みを続けました。それは聖徳太子の恩恵であります。そして終に、日本の仏の光によつて、静かに、そして明らかに、世の闇と光を見る眼を開かれたのであります。仏教自体が、虚偽と盲従を許さず、日本自体を捨て、われ自身を捨てて、他を本家とすることを許さない。それ自体を抱いて、仏の光に独立することを求めるのであります。

親鸞が申すむね

「仏説まことにおはしませば、善導の御釈虚言したまふべからず、善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごととならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか歟。」

善導大師はいみじき聖者であります。その自利において勝れた方であるばかりでなく、化他において不滅の行迹を残した方であります。わけて、聖人が「善導独明仏正意」と讃仰せられたがごとく、歪められた如来本願の真実を楷ただして、自ら「古今楷定」と言われるがごとく、古今の間違いをたたき治した方であります。大師によつて初めて如来の真実は大地に開放せられ、その闇雲は一掃せられました。特に、弥陀の大悲は大地の最後の一人をも恵み拯わんとせられることが明かとなり、下品下生の悪人の胸中にも金剛の大信の成就することを示されました。これもとより善導の智慧による功德ではありますが、善導の依つてもつて楷定するところは、大經に説かれたる本願の意であります。弥陀の本願真実なくしては善導はないのであります。

日本における法然上人もまたしかりであります。一点私心を雜えざる無我の念仏に生きたもうてあつたがゆえに、わが聖人をして、本師源空と仰がしめ、その本地を弥陀の智慧海と讃揚せしめたのであります。

かくして「親鸞がまふすむね」また真実であります。それは動かすことのできない自然法爾の信境であります。親鸞が申す旨また真実であります。誰かわが言うことは、真実かどうかわからぬが聞けということが許されましょう。しかしながら、それは親鸞が説く真実であるより先に、親鸞が聞き得た真実であり、やがて信ずるよりほかに道なき法爾の真実であり、先哲によつて実証され、証明された真実であり、さら

に聖人の念仏の境にあつて伝えずにはいられない真実であります。しかしながら聖人は「真実である」と宣言しないで「親鸞がまふすむね、またもてむなしかるべからずさふらふか歟」と、言の切迫を避けていられます。これひとえに、その卑謙の徳によるのであり、自分の強剛を出したまわぬがためであります。法は自らの真実を名告ります。人間の我慢によつてかき乱さるべきではありません。

第四節 聖人の悲涙と真面目しんめんぼく

「詮ずるところ、愚身の信心におきては此の如し。この上は念仏をとりて信じたてまつらんとも、また棄てんとも面々の御計なりと云々。」

何故に

この節は、短いお言葉であります。聖人の真面目がきわめて明かに拝せられるようであります。

念仏は、愚禿親鸞の全生命であるとともに、一切衆生の真生命たるべき、唯一の真実であります。一切衆生の当然帰すべき唯一の真実であります。それは私どものような凡夫にさえ、ほのかに知られることであります。「詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくの如し。」「これまでするお述べなされたがごとく、内からと外からの何者も、これを動かすことのできない「愚身が信心」であります。しかもそれが、釈尊より已来このかた、真実の歴史を現行せしめた、普遍の真実であつて、主観の独断ではない。愚禿が私的に捏造したものではない。にもかかわらず、聖人は「このうへは念仏をとり信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」と宣言せられます。何ゆえに、かく仰せられるのでありましょうか。

真実の智慧

念仏する者は、すべての人に念仏せしめたい。念仏せぬ者が真実の一道を持たず貪欲に引き廻されて、あたりこの世を空費する、信心の智慧なきものがいざ病氣ともなれば、迷信邪教に迷うてゆく、如来の功德を獲得せぬ者が衷心の満足も得ないで、人間の苦悩に泣き続けてゆく、そうした世相を凝視する時、一切の垢を交えぬ、彼岸の清浄そのままの大信心の世界に、一切の人を誘いたい。それはどうすることもできない、信心のうちに動く願でなくてはなりません。

しかるに悲しきかな、一切衆生、宿善なきかぎり、因縁なきかぎり、真実教に値うことができない。これだけはいかんとすべすべき術がない。たとい値うたところでも人の人の自覚に俟まつよりほかなき生命の世界においては、衷心よりの求めとなり、欲樂よくらくとならないかぎり、いかんとすべすべきことのできないことではないか。これまことに真実に念仏申さんとする者の通じての悲痛であります。聖人は今「念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」と、投げ出してしまわれたのであります。これはまた念仏者の全ての生きねばならぬ言であります。かく一切を投げ出したもうたのは一見冷たき放任のようであります。しかしそれは

けつして冷淡なる放任ではなくて、信心の智慧によるほんとうの生き方であります。でありますがゆえに、そこには尽きせざる悲涙を仰ぐのであります。

真実の愛語

仰せを承っている者は、はるばる関東からお慕いして上つて来た同行であります。その帰依者に向かつてのこのお言葉であります。もしその人々を人間的なものによつて繋ごうとせられるならばそれは易いことでもあります。しかるに聖人にはそれができない。自らの信念を率直に語つて、しかも人々を自由の世界に放つて、静かに人々の自覚に俟つという態度をとつていられます。自らについて来ることを強いな

いで、自信を述べ、他に念仏を強いるかわりに、自ら念仏の一道を歩みきられました。念仏の世界は征服ではないとともに、信心の世界は屈従や盲従ではない。衷心から躍動する生命の事実である。教役者はいたずらに教権をふりかざし、檀家をおどしつけて、外形的な宗制によつて、己が利養のために人を繋がんとし、門徒は盲従してその甘心を買わんとし、あるいは仏教を軽蔑して無宗教の野に去つてゆく。後には、寺と寺との権勢の争いと、さびしくも葬式事務だけが残るならば、もはや仏教とは名のみで、実は悪魔の巣となつたのである。世には、檀家をとることに力を注いでいる人があり、また檀家をとられたと恨み悲んでいる人がある。

念仏の人は、念仏の人と結ばれる。それであるがゆえに、一切の人は独立の世界にあらねばなりません。独自の世界にあつて、同一の信心に生きるところに、同一念仏無別道故の世界があるのであります。しこうしてかかる世界は、ただ、真実教を聞いて、如来の本願力廻向の大信心に目覚むるよりほかには成就しないことでもあります。

われらは聖人のこの「念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなり」とのみ言の上に、大地の真相をみつめた智慧の輝きとともに、仏心に裏附けられた、真実愛を拝むのであります。真実愛であります。安價なる同情ではない。一切の人を愛さずにはおかない充実しきつた愛語であります。しかも人間の迷妄によつて結ばれようとしないで、あくまで如来の真実によつて生きぬかれる聖人の尊い信境をそのまま出された聖語であります。われらはこの明澄至純な聖人の念仏の境に向かつて合掌せずにはおられません。